第857号 平成28年10月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

ザンスカール（インド・ヒマラヤ）の未踏峰探検と人の縁

インド北西部に陸封されたような形で残る「チベット世界」ラダック、ザンスカール。どこよりも色濃くチベット文化をとどめるこの地は、未踏峰の宝庫でもある。永年にわたってザンスカールをくまなく踏査した阪本公一会員に、10年間の足跡をレポートしていただいた。

阪本公一

ザンスカールの未踏峰探検に、いきなり私が飛びついた訳ではない。多くの人たちとのご縁が、インド・ヒマラヤのザンスカールの未踏峰探検に私を誘い出すきっかけとなった。

京大山岳部の先輩である高野昭吾氏の長女「たかのてるこ」さんが、『ダライ・ラマに恋して』という本を出版され（２００４年９月15日、幻冬舎発行）、高野先輩からご寄贈いただいた。「たかのてるこ」さんの名文で、この本の中心となっているインド北西部のラダックの純朴な住民と美しい自然に、すっかり魅了されてしまった。

さらにラダックについて知りたいと、いろいろインターネットで検索してみたところ、京大山岳部の大先輩の川喜田二郎氏に師事され、ヒマラヤ保全協会で活躍されている鎌田陽司さんが、スウェーデン生まれの言語人類学者であるHelena Norberg-Hodgeさんが執筆された書籍『Ancient Future, Learning From Ladakh』（１９９１年、Oxford University Press）を翻訳されたことが紹介されていた。早速、翻訳本の『ラダック　懐かしい未来』（２００３年７月10日、山と溪谷社発行）を買い求め、何度もむさぼるように熟読した。

ヘレナさんは、ラダックが外国人に開放された翌年の１９７５年から十数年間、ラダックに毎年数ヶ月間滞在され、ラダック人やザンスカール人との交流を積み重ねてラダックの文化や伝統を経験され、ラダックのエコロジカルな発展のために「レデッグ」（Ladakh Ecological Development Group）を設立した女性である。鎌田陽司さんも数年間ラダックに滞在され、世界にラダックの情報を発信するヘレナさんに共鳴して、ヘレナさんを日本に紹介すべく今回の翻訳本の出版となったらしい。ヘレナさんが来日されたとき、講演会で二度、彼女のラダックの話を聴く機会を得た。

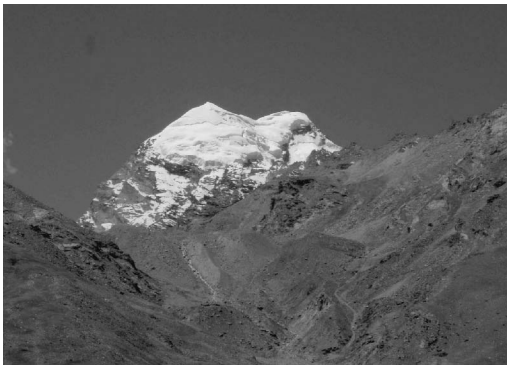
ラダックに興味が増すにつれ、より詳しい知識を得たいと本屋で探し回り、高木辛也著『ラダック』（２００１年６月21日、旅行人ウルトラガイド発行）を発見し、買い求めた。この本によると行政区域としてのJammu & Kashmir州の中に、ラダックとザンスカールがあるとのことで、人口的にはラダックが圧倒的に大きいが、ザンスカ

2016年（平成28年）
10月号（No. 857）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

ザンスカール（インド・ヒマラヤ）の未踏峰探検と人の縁…… 1
日本山岳会とヒマラヤン・クラブのこと‥ 5
平成28年度支部合同会議を東西で開催‥ 6
10月から準会員制度がスタート‥ 8
さんけん通信…… 9
図書交換会出品目録および購入申込みの案内‥ 10
Climbing&Medicine・74…… 12
活動報告…… 13
　山行委員会
支部だより…… 13
　青森支部／越後支部
会務報告…… 15
新入会員…… 16
会員異動…… 17
ルーム日誌…… 17
INFORMATION …… 17
「晩餐会記念懇親山行」のご案内‥ 19
編集後記…… 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第２、第４土曜日……閉室
第1、第3、第５土曜日‥‥10～18時


PadamからGompe谷の未踏峰P6157（T20）

ールはグレート・ヒマラヤに囲まれた風光明媚な山岳地域であることが詳しく書かれていた。

ラダックのLeh 近辺にある数多くのチベット仏教のゴンパ（寺院）を訪問すると同時に、ザンスカール最北部にあるNun（７１３５ｍ）、Kun（７０７７ｍ）からずっと南に連なるグレート・ヒマラヤのザンスカール連山を一度眺めてみたいと、約2年がかりでインド・ヒマラヤ旅行の企画を練り始めた。

いろいろ検討した結果、New Delhiから飛行機でラダックのLehに入り、数日間ゴンパを参拝した後、チャーター車でKargilからPadamに行って、Padamから Tsarap河沿いにトレッキングをして、Shingo La（５０４５ｍ）からDarchaに行く計画を立てた。Darchaから車でManali 経由Shimla まで行き、そこから有名なToy train に乗ってDelhi に戻ることとした。

メンバーは、紆余曲折があったが、京大山岳部の先輩の松浦祥次郎氏、谷口朗氏、福本昌弘氏、伊藤寿男氏と山城高校の同級生の八太幸行氏と私の計6名となり、２００７年8月に旅立った。

Nun、Kunを経てDarchaまで至るグレート・ヒマラヤには、東側がザンスカール山群、西側はキシュトワール山群と山並みが連なっていて、私たちを興奮させた。ネパールと違って、宿泊施設のロッジが全くないザンスカールは、テント生活の毎日であり、それだけ山登り本来の楽しさが味わえる。

PadamからSingo Laに行く途中、Reru 谷の出合より少し入って谷の奥を覗いてみたら、魅力的な６０００ｍ前後の山々が連なっていた。「Reru谷周辺の山々はすでに登り尽くされているのだろうか?」「それとも、手つかずの未踏峰として残っているのだろうか?」との深い関心が湧いてきた。

帰国後、ヒマラヤン・クラブの友人Satyabrataさんに早速問い合わせた。ザンスカール南部の山々は、ほとんどが未踏峰のままで残されているはずだが、「自分は詳しい知識を持っていないので、ヒマラヤン・クラブの重鎮のHarish Kapadiaさんに問い合わせたらどうか」との貴重なアドバイスを貰った。

Harish Kapadiaさんから早速返事があり、「ザンスカール南部はいまだ誰も登りに行っていない未知の山域です。詳細な登山記録はＩＭＦに問い合わせた上、ぜひあなた方で未踏峰探査にトライしてみてください。」と温かい励ましの言葉を頂戴した。

これら多くの方々とのご縁とアドバイスのお陰で、私のザンスカールの未踏峰探検がスタートするきっかけになった訳である。

２００７年以降の私の海外の山旅は、下記のとおりである。

1．２００７年8月22日～9月26日：ザンスカール・トレッキング（Padam～Darcha）
2．２００８年10月10日～11月18日：ネパール、ラムドン・ピーク（５９２５ｍ）登山。
3．２００９年4月12日～5月9日：ネパール、ランタン谷～ヘランブー・トレッキング。
4．２００９年8月6日～9月12日：ザンスカール、Reru 谷の未踏峰探検。
5．２０１０年8月5日～11日：Leh 近郊で土石流災害発生のためNew Delhiより帰国。
6．２０１１年4月6日～5月9日：ネパール、ガネッシュ氷河内院の未踏峰探査。
7．２０１１年8月4日～9月15日：ザンスカール、Lenak 谷およびGiabul 谷の未踏峰探検。
8．２０１２年6月27日～8月1日：Temasa谷・Gompe 谷・Haptal谷の未踏峰探検。
9．２０１３年6月26日～7月9日：ラダック、Tso Moriri およびNubra 谷のトレッキング。
10．２０１４年6月13日～7月4日：インド・ヒマラヤ、キナールおよびスピティの未踏峰探検。
11．２０１５年8月4日～29日：ラダック、Tso Moriri のトレッキン

グ（ラダック最南部のParang 谷の未踏峰探検で出かけるも、豪雨のためにParang 谷に入れず、Tso Moriri 周辺のトレッキングだけに終わった）。

12．２０１６年８月２日～27日：ザンスカール、Mulung 谷の未踏峰探検。

＊Reru 谷の未踏峰探査、Lenak 谷・Giabul谷の探査、Temasa 谷・Gompe谷・Haptal 谷の未踏峰探査で、一応ザンスカール南部の大きな谷の探検が終わったので、いまだ６０００ｍの未踏峰がたくさん残っているキナール・スピティ山域や、ラダックの最南部のParang 谷の探査に手を伸ばすことにした。

＊私の海外の山旅の記録は、ＡＡＣＫ（京都大学学士山岳会）のホームページ（http：//www.aack.or.jp/２０１１年以前の記録は会員のページに掲載）および東京雲稜会の友人・前田恵久さんのホームページ（http：//www.e-iori.sakura.ne.jp）に掲載されているので、ご興味があればご覧いただきたい。また、私の記録で何かご質問があれば、ご遠慮なく下記にお問い合わせいただきたい。E-mail：sakamotogudo@cronos.ocn.ne.jp

＊ザンスカールの未踏峰探検の英文記録については、日本山岳会の英字情報誌 Japanese Alpine News（ＪＡＮ）、インドHimalayan ClubのThe Himalayan Journal（ＨＪ）およびアメリカ山岳会のThe American Alpine Journal（ＡＪ）にも寄稿してきた。

＊日本山岳会東海支部発行の１１０周年記念出版『インド・ヒマラヤ』（２０１５年12月１日発行）の「ザンスカール」および「キシュトワール」の章を執筆。

＊ザンスカールに行き始めてから、ラダックの大先達の沖允人さん（ラダックが外国人に開放されて世界で初めて、１９７４年にラダックに入った方）、１９７７年にキシュトワールのバルナジ２峰中央峰（６１７０ｍ）の初登頂をされた広島山岳会の名越実さんや、１９８０年にザンスカールのＺ１峰（６１８１ｍ）に初登頂された北大ワンダーフォーゲル部ＯＢ会隊の大内倫文さんたちとも交流が始まり、いろいろと貴重な情報を貰い、ご教示いただいた。

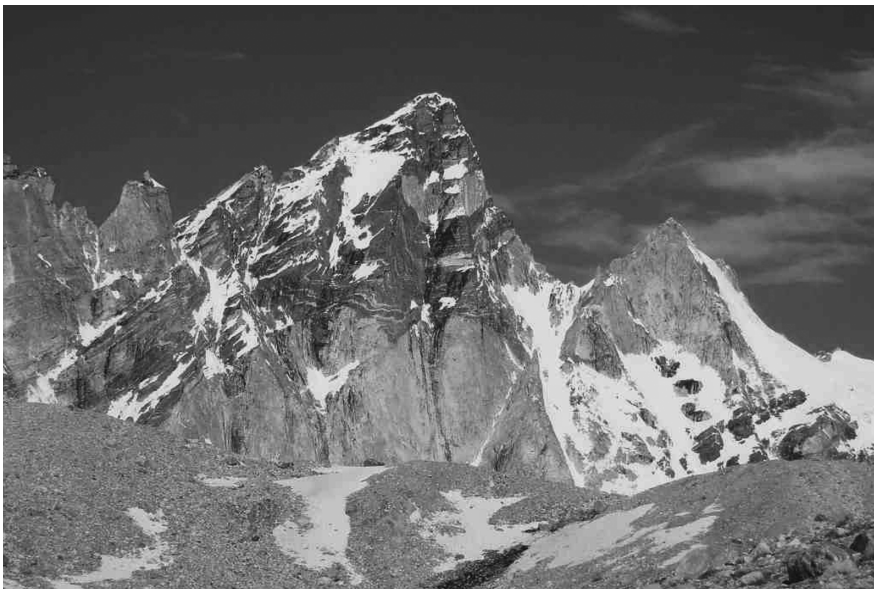
私が国内外に情報発信したザンスカールの未踏峰探検の記録を読んで、数多くの世界のクライマーたちが知られざる未踏峰の挑戦に出かけて、すばらしい記録を残してくれたことは、年寄りの私たちにとって、何よりも嬉しいことであり、かつ大きな励ましとなった。

今までに下記の遠征隊が、私たちの記録を参照してザンスカールに遠征してくれた。

1．2011年８月：長野労山マスターズ隊 Reru 谷右股（Nateo Nala）の無名峰（5890ｍ）に初登頂。

2．２０１１年９月：英国 Imperial College London隊 Reru 谷無名西谷（同隊がTetleh Nala と命名）のLama Jisma Kangri（６２７６ｍ）、Bhaio AurBheno Ki Khushi（5９８０ｍ）、Moel Kangri（5９３０ｍ）に初登頂。

3．２０１２年８月：スイス山岳会ジュネーブ支部隊 Reru谷の左股（Katkar Nala）の未踏峰 Red Apple（６０７０ｍ）、Gocook（６０５０ｍ）に初登頂したと発表したが、自



Temasa谷の支谷、Korlomshe谷の未踏峰P5957（T10）

Reru谷入り口の未踏峰P6071（R1）

4．２０１２年８月：スコットランド山岳会隊Gibul谷の支谷であるNamkha Tokpo 奥のP6150（G22）West Peakおよび P5850（G23）に初登頂した。

5．２０１２年９月：京都大学山岳部隊 Lenak谷左股のP6080（L13）に登頂。ＩＭＦは初登頂と認めたが、実際にはピークにケルンがあった（無許可登山をしたスイス隊の痕跡であることが後日判明）。

6．２０１２年９月：日本山岳会学生部隊 Lenak谷右股P6165（L10）に初登頂。

7．２０１３年８月：ギリシャ隊 Reru谷左股（Katkar Nala）の未踏峰P6148（R35）およびP6158（R26）に初登頂。R35をKatkar Kangri、R26をMukti Kangriと同分たちの命名した山名で、かつ自分たちの測量した高度で記録し、概念図も添付しなかったため、どの山に登頂したのか極めて曖昧だった。その後ＩＭＦと一緒にチェックしたところ、Tong'a Ri（６０６０ｍ）は、京大山岳部隊が、スイス隊が登った直後の２０１２年９月に登頂したP6080（L13）であることが判明した。

隊が命名した。

8．２０１４年７月：インド Himalayan Club Kolkata Section 隊 Gompe谷最奥のP6184（T13）に初登頂。

9．２０１４年８～９月：学習院大学山岳部隊 Lenak 谷左股のP6070（L15）に初登頂。同隊はこの山を Gyalmo Kangri と命名した。

10．２０１４年９月：英国山岳会隊（Derek Buckle隊長）Temasa Nalaの支谷 Korlomshe Tokpoの未踏峰 Temple（５９４７ｍ）、Kusyabla（５９１６ｍ）、Matterhorn に初登頂。

11．２０１５年９月：スロベニア隊 Reru谷の西谷（Tetleh Nala）の未踏峰Khumcha Ri（６０６４ｍ）、Kunlong Ri（６０５８ｍ）、Ri Pok（６２１０ｍ）に初登頂。

12．２０１５年９月：日本大学山岳部隊 Gompe谷の未踏峰P6162（T19）とP6157（T20）に挑戦するも、T19とT20のコルからの稜線が厳しく、残念ながらやむなく撤退した。

13．２０１６年６月：ルーマニア隊 Gompe 谷の未踏峰P6431（T13）South Peak に初登頂。

ザンスカール南部の谷で、いまだ私たちが未踏峰探査に出かけていないMulung Tokpo谷周辺には、６０００ｍ峰は数座しかない。が、ＩＭＦの情報では、この山域での正式登頂記録はないとのことなので、２０１６年８月に、ザンスカール南部の最後の未踏峰探検に出かけることにした。

５月末に痛めた私の右足首の捻挫が悪化し私の体調は極めて悪く、ノロノロとした歩行で、Omasi Laに突き上げるNabil Nalaへ上がることはできなかった。５０００ｍ台の未踏峰しか写真を撮ってくることができなかったが、のんびりとしたトレッキングをそれなりに楽しむことができた。

今回も、２００７年以来お世話になっている、Lehにあるエージェントの Hidden Himalaya のツワン・ヤンペルさんと奥さんの上甲紗智さんにサポートして貰った。

私のザンスカールやラダックの旅は、多くの人のご縁で続けられたと感謝の気持ちで一杯だ。

連載　日本山岳会とヒマラヤン・クラブのこと

1 JACとHCの絆

沖　允人

創立110周年記念出版の『インド・ヒマラヤ』の編集意図は、日本人によるインド・ヒマラヤ登山記録の集成であり、山名解説に加えて登山記録を37編ほど収録した。インドの登山団体であるThe Himalayan Club（HC）にも協力を仰ぐことにし、Mr. Harish Kapadia（名誉編集長）、Mr. Divyesh Muni（副会長）、Mr. Debabrata Mukerjee（コルカタの委員）の3人に編集委員を依頼し、貴重な原稿も寄せていただいた。

その機会にムンバイの新しくなったHCの事務所を訪ねたことがある。市の外れにある、分かりにくいビルの3階に事務室と図書館があり、女性事務員と手伝いの男性がいるだけの、ひっそりとした事務所であった（314 Turf Estate, Shakti Mills Lane, Off Dr. E. Moses Road, Mahalakshmi, Mumbai - 400 011 INDIA）。会合や研究会は盛んに実施されているが、それらは近くや市中心の会場を借りて開催されるようであった。

会長はMr. Tanil Kilachandで、伝統ある年報のThe Himalayan Journal（HJ）の編集長はMr. Harish KapadiaからMs. Nandini Purandare (Hon. Editor)に代わり、今年Vol.71が発行されている。HJとは別にE-LETTERが年1回程度発行され、最近号はVol.34-July 2016である。

JACは、2015年が創立110周年記念の年であったが、HCはJACより13年後の1928年に創立され、近く創立90周年を迎え、チョルテン（仏塔）をデザインしたロゴマークの改訂をはじめ、いくつかの行事が企画されている。記念登山はすでに実施され、東部カラコルムのRyong Kharu谷とSagtogpa氷河の探査、無名峰（6195m）とSagtogpa Kangri（6305m）の初登頂を果たし、Sagtogpa col（5915m）を越えてショーク川とヌブラ谷につながるRongdo谷に入るという成果を挙げている。と紹介しても、日本人の多くはなじみのない山域（サセル・カンリの南東約45㎞）であろう。しかし、世界のヒマラヤニストからは注目されている山域である。

1936年の立教大学によるナンダ・コート（6861m）の初登頂が、インド・ヒマラヤの本格的登山としての日本とのつながりの始まりで、そのころからJAC会員の目がインド・ヒマラヤに向かい、HCの会員になった人もあり、マナスル登山の1956年代には関心がさらに高まり、会員も増加した。1970～80年代にはガルワール・ヒマラヤがオープンされ、東部カラコルムも門戸を開いて、インド・ヒマラヤに向かうJAC会員が増加した。この間の活動に対して、松田雄一、大塚博美、尾形好雄、中村保、稲田定重の各氏がHC名誉会員として推戴されている。日本人の一般会員は約30名で、ほとんどがJAC会員である。Mr.Harish Kapadiaはインド人としてただ一人のJAC名誉会員である。

最近のインド人によるインド・ヒマラヤ登山は年々増加し、年間80隊（2015年）を超えるが、日本人のインド・ヒマラヤ登山は年間わずか1～2隊と減少している。外国隊は48隊（2015年）である。この登山隊数は登山許可を取得した隊の数で、ラダックのレーの町の南にあるストック・カンリ（6313m）に登るような商業登山隊は除外してある。ストック・カンリ登山は夏の富士山並みで、今年の夏には外国人500名、インド人700名の登山者が登山し、BCはゴミの山で、その処理に頭を痛めているという。

商業登山もあながち悪くはないが、HCの創立90周年を迎えて、JACもかつてのようなインドとの合同登山など、これまでの絆をより深いものにできればと思っている。

ヒマラヤン・クラブの周年行事のための歴代ロゴ

REPORT

平成28年度支部合同会議を東西で開催

総務担当常務理事　佐藤　守

平成28年度は、9月10～11日に東京・四ツ谷駅前の主婦会館プラザエフで、北海道・東北・北関東・南関東・中部の各ブロックに属する18支部による東日本支部合同会議が、9月24～25日には大阪市住之江区の大阪アカデミアで東海・北陸・近畿・中国四国・九州の各ブロックに属する15支部による西日本支部合同会議が、各支部長・事務局長が参加して開催された。

以下、東日本と西日本の両方の会議について、併せてその模様を報告する。

1日目は会議の冒頭、小林会長から「日本山岳会の最大の課題は会員増強と中長期の財政基盤の安定化であり、公益社団法人としての日本山岳会が存続し続け、その役割を果たすために、我々がどのような活動をしなければならないか、活発な意見交換を期待したい」との挨拶があり、会務報告、会員制度の変更に関する説明と意見交換、会員増強に対する各支部の取り組み状況の報告と意見交換がなされた。

(1)　会務報告では、日本山岳会の組織・業務執行体制・会員数の現況について佐藤総務担当常務理事から説明があり、財務担当の吉川副会長から、2009年以降の会員数の動向と会費収入に基づき、「新会員を増やさなければ、日本山岳会は現在の体制を維持できず崩壊する」「支部助成金は、会員増加策を目的とした支出に重点配分を行なう」「事業補助金について平成29年度も減額するが、新設の準会員にかかる支部助成金・新入会員獲得報奨金は、通常会員と同額支給する」等の説明があった。

(2)　会員制度の変更に関する説明では、準会員規程と賛助会員規程についての逐条説明があった。また、本年10月以降、従来の会員証に替えてプラスチック製の新会員証(JACカード)を発行すること。このカードを提示することで提携する山小屋・スポーツ用品店等で一定の割引等のサービスを受けることができるよう準備している、との説明があった。

準会員制度、新会員証の概要については、本会報の8頁に掲載されている。

(3)　会員増強に対する各支部の取り組みと意見の主な内容は次のとおり。

・セミナー、登山教室、山フェスタなどが入会者増加につながっている。
・各種イベントの開催が増えており、これらの機会に入会勧誘している。
・準会員制度の仕組みを活かして入会を働きかけたい。
・通常会員の入会金、年会費が高いと思われており、準会員は勧誘しやすい。
・HPを支部においても活用する必要がある。本部でHPを改善してほしい。
・会友は支部の貴重な財源である。
・会員にはなれない人にとって、年数の縛りがない会友の仕組みは必要。
・入会者はいるが、それ以上に高齢化等による退会者が多い。
・人口減となっている地域で会員増加は難しい。

2日目は「山の日事業への取り組み」と「ブロックの取り組み状況」についての報告と意見交換、支部の事業報告と会計報告に関する留意事項についての説明、連絡事項と質疑応答が行なわれた。

(1)　山の日事業への取り組み

「山の日」が今年からスタートしたことで、全支部において「山の日」を冠した講演会、シンポジウム、映画会、一般公募登山、家族登山、親子キャンプ、清掃登山など様々な行事を実施している。

特徴的なのは、各支部とも地方公共団体や岳連等の山岳団体、地元新聞社・テレビ局等と連携して

発言する小林会長(中央)ら本部役員

実施していることで、各行事への参加者数も多く、「山の日」の周知とともに日本山岳会支部の知名度も相当に上がったことが報告された。

　従来から「夏山フェスタ」を実施している東海支部に加え、今年は群馬支部、栃木支部、福岡支部・北九州支部などでも開催し、いずれも数千人の参加者があった。実施した支部からは、イベントで配布するチラシ、パンフレット等の提供について、本部への要望があった。

⑵　ブロックの取り組み状況

　ブロック内支部による懇談会と懇親登山は各ブロックで開催しているが、その他の行事については、県岳連等と共同して県内で開催しているのが実態であり、ブロックを活用した取り組みを行なうまでには至っていない。

２日間にわたり活発な討議が続けられた

⑶　支部の事業報告と会計報告に関する留意事項

　財務担当の吉川副会長から、今年の7月に実施された内閣府の検査における指導も踏まえた会計報告書の記載方法、現金の取り扱い、マイナンバー制度と報酬の源泉徴収などについての説明、佐野公益法人運営委員長から相続に伴う寄付の取り扱いについての説明と質疑応答を行なった。

⑷　連絡事項と質疑応答

・個人情報の取り扱いと会員名簿の作成について。全国の会員名簿を作成してほしいとの要望が通常総会で提起されたことについて支部の意見を求めたところ、必要とする支部はなく、発行の要望もなかった。

・先ごろ登山講習会を実施しているスポーツ用品店が、警視庁から旅行業法違反で書類送検された事例を基に、支部で主催する一般募集の登山教室等のケースについて説明があった。

・今年の年次晩餐会の案内方法変更について説明があった。

・平成29年度全国支部懇談会の開催について、茨城支部から説明と案内があった。

⑸　支部合同会議の開催方法について

　昨年の支部合同会議の際、複数の支部から発言の時間がないとの意見があり、全支部の発言時間を確保できるよう、本年度は試行的に東西に分けて開催した。

　今回の会議の最後に、各支部に対し意見を求めたところ、複数の支部から1年に1度の会議であり、全国の支部が一堂に会して各支部の状況を直接聞き、意見交換する方が良い、との意見が出され、これに対する反対意見はなかった。

　また、会議の運営方法について、事前に報告を求めるなどして、発表の時間を短縮するなどの工夫をすべき、という意見もあり、本部からは、来年度以降の開催に向けてはこれらの意見を参考にしていく、との説明があった。

日中韓三国学生交流登山隊へのご寄付

　15名の役員・元役員から合計18万円のご寄付をいただきました。日本で開催された三国学生交流登山は8月に参加学生の笑顔とともに無事終了しました。ここに謹んで御礼申し上げます。

5万円　中山茂樹

1万円　神長幹雄、大槻利行、大久保春美、佐藤守、直江俊弐、谷内剛、吉永英明、小林政志、尾上昇、山田和人、吉川正幸、平井拓雄。

5千円　森武昭、重廣恒夫。（敬称略・到着順）

寄付金の受入報告　平成28年8月報告まで

寄付者など	金額（単位千円）	寄付の目的、その他
神長 幹雄 理事	100	110周年記念学術調査隊へ
吉田 寛治 会員	10	永年会員からのご寄付
大西 康郎 会員	10	〃
杉田　博 会員	12	〃
杉山 泰司 会員	50	〃

NOTICE

10月から準会員制度がスタート

準会員制度については、会報「山」848号（2016年1月号）に概要をご紹介しましたが、本年6月の通常総会で承認され、この10月1日からスタートしました。

その主目的は、将来にわたって通常会員数を増やし、当会の運営基盤、財政基盤を確立し、日本山岳会を安定的に運営していくため、当会の活動内容を理解する人を増やし、会員の裾野を広げていくことにあります。

また、我が国の登山人口は、総務省の調査によれば約1000万人と言われていますが、その大部分はどの山岳会にも所属していない未組織登山者です。全山岳遭難者に占める単独登山中の遭難者の割合が35・1％に達しているという警察庁のデータは、安全登山の啓発・指導の必要性を示唆しています。未組織登山者に準会員となるようお勧めすることは、公益社団法人としての当会が社会に貢献していける分野でもあります。

日本山岳会に対しては、いまだに高度な技術を駆使して困難な山に取り組んでいる山岳会で、入会するには敷居が高いと考えている人が多数います。また、内容がよく分からないまま、安くはない入会金・年会費を払うのは不安があるといった声も多く聞かれます。このような実態に鑑み、入会金・会費や入会手続きなどのハードルを低くし、一定の研修に相当する期間を準会員として過ごしていただいた上で、通常会員になっていただく仕組みを導入したものです。

もちろん、いままでどおり準会員を経ずに直接、通常会員として入会していただくこともできます。

準会員制度の内容は以下のとおりですので、お知り合いの方やこれから登山を志す方に、入会をお勧めいただければ幸いです。

①入会資格　日本山岳会の趣旨に賛同する個人（年齢制限はなし）。

②準会員の期間　3年間（期限内に通常会員に移行しない場合は除籍に）。

③準会員入会金　5000円（ただし、26歳未満は入会金免除）。

④準会員年会費　6000円（初年度は、入会月により月割あり）。

⑤入会手続き　紹介者のある申込書の提出。紹介者は会員であれば誰でも可。

⑥通常会員との違い　総会での議決権はない。本部・支部の役員には就任できない。

⑦会報「山」は配布するが、機関誌『山岳』は有料販売となる。

なお、詳細は準会員規程を定め、ホームページに掲載していますのでご覧ください。

新会員証発行のお知らせ

公益社団法人日本山岳会では、入会時に会員証をお渡ししていますが、今後、従来の会員証から、下記のようなプラスチックカード型の会員証（以下「JACカード」という）に変更いたします。

＊形状　プラスチックカードの表面・裏面にプリント。

＊記載内容

表面：上高地山岳研究所のシンボルである鐘を図案化。発行者名（公益社団法人日本山岳会）、住所、電話番号。

裏面：会員番号、氏名、フリガナ、有効期限。

＊機能　公益社団法人日本山岳会の会員または準会員であることを証明し、所持することによって、非常時のIDカードとしての役割を果たすほか、本会と提携する山小屋やスポーツ用品店等の施設において提示することにより、当該施設の利用に関する割引等を受けることができる。

＊提携施設　本会と提携する山小屋やスポーツ用品店等の施設名については、会報「山」および当会ホームページにおいて随時、周知する。

＊有効期限　発行した年度を初年度として3年度目の3月末まで。

＊禁止行為等　JACカードは他人に貸与し、または譲渡してはならない。また、退会時には返却する。

＊発行

新入会員：平成28年10月以降の入会者に対し交付する。

既会員：これまでの会員証では、提携施設でのサービスを受けることができず、提携施設でのサービスを受けるためには、JACカードが必要となる。JACカードの発行をご希望の方には、平成29年1月以降、提携施設名の発表とともに発行の手続きをお知らせする。

（佐藤　守）

さんけん通信

「山の日」の上高地と山研の夏

元川里美

植物の開花も小鳥たちの子育ても、例年に比べると半月は早く進んでいた春から始まり、いつまでたっても季節の帳尻が合わない感覚を残したまま、上高地にも夏がやって来ました。

県道上高地公園線に「上高地トンネル」が開通し、遊歩道にも整備の手が入り始め、「山の日」に向けての準備が着々と進められるなか、上高地で働く人々の間でも、「山の日」の話題が中心となっていました。とにかく初めての祝日の、初めてのイベントですから、当日になってみないと分からないというようなことが多く、わずかに得た情報を交換しながら、皆一様に落ち着かない日々を過ごしていました。

そして迎えた8月11日は、申し分のない山日和。イワツバメが飛び交う高空の下で、一連の行事がスタートしました。私も会場の末席で記念式典に参加させていただきましたが、開幕を告げる8つの鐘の音は、鐸を鳴らして神々に祈りを捧げた太古の儀式を思わせ、また「『山と共に』未来への誓い」は、子どもたちの瑞々しい声によって、未来へと大切に引き継がれていくことを強く印象付けました。上高地の歴史に刻まれた第1回「山の日」は、山の呼吸のようにゆったりとしていて、心に静かな余韻の残る一日となりました。

夏休みが始まると同時に山研内も急に活気づいて、子どもたちも訪れるようになりました。小さな手に鉛筆を握り締めて、窓際で宿題を解く小学生もいれば、父親とともに六百山に挑んだ頼もしい中高生の姉弟の姿もありました。むろん、山は楽しみや感動ばかりを与えてくれるわけではないけれど、多感な時期にこうして自然に触れたり山に分け入ることを教えられた経験は、きっとその後の人生を色彩豊かなものにしてくれるに違いありません。

今年は少し外を歩く時間をつくろうと心に決めて、最初のうちは新聞も配達に頼らずに毎日、バスターミナルまで受け取りに行ったりもしていましたが、夏休みともなれば、やはり一日のほとんどを館内で過ごすことになりました。それでも、例えば入れ替わり立ち替わりやって来る虫たちが季節の便りを運んでくれるので、外へ出ないときでも案外、自然の移ろいには気付けるものです。今年はカミキリモドキが多く発生したらしく、天井にしがみつく彼らを補虫網で捕まえては外に放すことが朝の日課となっていましたが、最近は補虫網の出番もめっきり少なくなりました。

山研裏で咲いたアケボノシュスラン

今夏は〝山研テラスでアオダイショウ脱皮〟という珍事も起こりました。気持ち良さそうにスルスルと皮を脱いでゆく一部始終を、こちらは驚きのあまり瞬きもせずに見詰めていましたが、当の本人は皮を放置して、何事もなかったようにそのまま散歩に出かけていきました。ともに感動を分かち合う相手がいなかったのは残念でした。

また、山研裏でアケボノシュスランの白花が咲いたことも、私にとってはビッグニュースでした。上高地では株数が少ないうえに、花はたいてい薄桃色です。小群落を作っていることはすでに確認していましたが、昨年は蕾が付かず開花には至りませんでした。今年はそのうちの7株ほどが純白の花を咲かせました。これもまた、独りひっそりと喜びに浸った、ひと夏の出来事でした。

自然に包まれた山研での日々は、小さな発見や驚きに満ちています。これから閉所までの残りひと月は、折り目正しく冬支度を整える生き物たちの営みを楽しめそうです。

＊山研は10月末に閉所となります。来春は4月下旬に開所予定です。

No.	書名	著者	出版社	発行年、その他	価格
117	槍・穂高賛歌	山本和雄	山と溪谷社	1983　カバー	400
119	わがエベレスト　加藤保男写真集	加藤保男	読売新聞社	S59　カバー	800
120	山の輪舞　水越武写真集	水越武	山と溪谷社	1983　カバー	500
122	上高地	深田久弥・長尾宏也編	修道社	S34　3版　函	400
136	チベットの七年	H・ハーラー　福田宏年訳	白水社	S32　カバー	400
143	ヒマラヤの真珠	フォスコ・マライーニ　牧野文子訳	理論社	1956　カバー	400
147	日本登山体系　1　北海道・東北の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1980　函	400
148	日本登山体系　2　南会津・越後の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1980　函・帯	400
149	日本登山体系　3　谷川岳	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1980　函・帯	400
151	日本登山体系　5　剣岳・立山・黒部	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1981　函・帯	400
152	日本登山体系　6　後立山・明星山・海谷・戸隠	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1981　函・帯	400
153	日本登山体系　7　槍ヶ岳・穂高岳	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1980　函・帯	400
155	日本登山体系　9　南アルプス	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘/編	白水社	1984　3刷　函・帯	400
156	チベットのアルプス	中村　保	山と溪谷社	2005　カバー・帯 著者署名あり	400
157	最後の辺境　チベットのアルプス	中村　保	山と溪谷社	2012　カバー・帯 著者署名あり	400
160	快晴の山	織内信彦	茗溪堂	1977　カバー 著者署名あり	400
162	七大陸最高峰に立って	田部井淳子	小学館	1992　カバー・帯 著者署名あり	400
166	会津の峠（上・下）　新版	笹川壽夫	歴史春秋社	2006　カバー	500
169	にど　だもれ　回想	牧野四子吉・文子	私家版	1988　函	400
188	復刻　山と溪谷　創刊号・2号・3号－ 山と溪谷社創立50周年記念	山と溪谷社	山と溪谷社	昭和55　帙・外函・ハーケン型ペーパーナイフ	1200
198	北アルプス　稜線を飛ぶ	大森弘一郎	山と溪谷社	昭和56　3版	400
211	ヒマラヤの高峰1～5	深田久弥	雪華社	1964～1965　函	1200
231	ヒマラヤの高峰　深田久弥・山の文学全集	朝日新聞社編	朝日新聞社	S53　カバー	500
233	雪線　日本アルプス写真集	船越好文	東京新聞出版局	1958　函	800
234	山脇哲臣山岳写真集	山脇哲臣	高知営林局	S47　カバー	400
236	写真集　飯豊連峰　山と花	藤島玄監修　小荒井実	誠文堂新光社	1981　2刷　函	400
237	ジュガール・ヒマール　風見武秀ヒマラヤ写真集	風見武秀	新潮社	S34　カバー	400
240	岩と雪　16　アルピニスト25人集		山と溪谷社	S44	400
241	岩と雪　19　ナイロンザイル切断		山と溪谷社	S45	400
265	本のある山旅	大森久雄	山と溪谷社	1996　著者サインあり　カバー	500
266	チョモランマ・チベット 日本山岳会 珠穆朗瑪登山隊公式報告	日本山岳会珠穆朗瑪登山隊	講談社	S56　カバー	1000
267	カラコルムヒマラヤ　大星夜	藤田弘基	誠文堂新光社	2012　函	500
268	毎日グラフ増刊　エベレスト登頂	日本山岳会	毎日新聞社	1970	500
269	ヨーロッパアルプス THE ALPS	白旗史朗	山と溪谷社	1978　函	500
290	山のABE　絵はがき通信	あべ　みつこ　　安部和夫	茗溪堂	2006　カバー	400
293	『日本百名山』の深田久弥と山の文学展	世田谷文学館	世田谷文学館	平7	600
611	東西登山史考	田口二郎	岩波書店 同時代ライブラリー	1995　著者献呈署名あり	500
Y14	The　Mountain　World　1953－69　(10冊)	Marcel　Kurz　ed.	Harper & Brothers publishers	1953－69	1500

●頒布価格が300円以下の本を省略しています。全目録はホームページ（JACトップ→会員サイト→活動・組織の紹介→委員会→図書委員会）から検索できます。また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

●目録の申込み、問合せは三好まき子まで　℡ 090-8019-8601　ﾒｰﾙ 344mm@mbe.nifty.com

図書交換会出品目録および購入申込みの案内

今年も年次晩餐会で「図書交換会」を開催します。出品本は約300冊です。交換会当日の詳細は18ページの「インフォメーション欄」に掲載していますが、会場に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

●郵便（日本山岳会・図書委員会あて）またはメール（344mm@mbe.nifty.com）で、11月15日までにお申込みください。

●購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本（★１～★２）の場合も、入札価格を明記のうえ、同じ要領でお申込みください。

●複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は図書委員が代行し、本は交換会終了後にお送りします。

●購入図書の送料は購入者負担とし、代金と一緒に請求させていただきます。

No.	書名	著者	出版社	発行年、その他	価格
★1	日本北アルプス登山案内	冠松次郎	第一書房	S14　カバー	入札　最低価格2000から
★2	季刊　銀花　畦地梅太郎		文化出版局	1998	入札　最低価格2000から
11	イル・ミラモンド　60年間のイメージの記録	フォスコ・マライーニ監修	東京都写真美術館図録	2001	800
12	ロック　クライミング	安久一成	東京新聞出版局	S43　函	400
19	岩と雪16　アルピニスト25人集		山と溪谷社	S44	400
22	白いクモ　アイガー北壁	ハインリヒ・ハラー　横川文雄訳	二見書房	S48　カバー	400
23	無償の征服者	リオネル・テレイ　横川文雄・大森久雄訳	二見書房	S49　カバー	400
24	若き日の山行	ルイ・ラシュナル　ジェラール・エルゾーグ　近藤等訳	二見書房	S50　再版　カバー	400
35	ネパール・ヒマラヤ探検記録　ネパールと日本1899-1966	日高信六郎・川喜田二郎編著	講談社	S42　カバー	500
38	アルプス大縦走	岩橋崇至	山と溪谷社	1984　カバー	400
39	名峰日本アルプス	白簱史朗	山と溪谷社	S57　カバー	400
40	日本登山図集	日地出版株式会社出版部	日地出版	S61　カバー	500
41	私の槍が岳	穂苅貞雄	朝日新聞社	1985　カバー	400
42	尖峰　氷壁　登攀　ヨーロッパ・アルプス	中野融・写真　白簱史朗・文	朝日新聞社	1985　カバー	400
59	山水大観	大町桂月	鍾美堂	T6　函	700
62	天と地の間に	ガストン・レビュファ　近藤等訳	新潮社	S38	500
64	日本300名山ガイド　西日本編・東日本編	市川静子ほか	新ハイキング社	H6　カバー	400
68	マナスル　1952 ～ 3・1954 ～ 6（2冊）	日本山岳会編	毎日新聞社	昭和29・S33　カバー傷み	1000
70	後立山連峰	冠松次郎	第一書房	S6　蔵書印あり	500
72	廊下と窓	冠松次郎	三省堂	S15　蔵書印あり	500
74	登山の小史と用具の変遷	西岡一雄	朋文堂	S33	800
75	登山史の発掘	山崎安治	茗溪堂	1979　函	400
76	岩と人　日本岩壁登攀史	斎藤一男	東京新聞出版局	S55　函	400
77	わが山わが渓	冠松次郎	墨水書房	S17　蔵書印あり	400
78	山の序曲	山崎安治	朋文堂	S42　函	400
79	登山史の周辺	山崎安治	茗溪堂	1984　函	400
80	山の人達	高橋文太郎	龍星閣	S13	800
89	日本山岳研究	今西錦司	中央公論社	S50　3版	500
95	自然と山と	今西錦司	筑摩書房	1971　函	400
96	そこに山がある	今西錦司	日本経済新聞社	S48　函	400
98	松方三郎	松本重治編	共同通信社	S49　カバー	400
103	シルクロードの旅	深田久弥	朝日新聞社	1977　カバー	400
107	無償の征服者	リオネル・テレイ　横川文雄・大森久雄訳	二見書房	S49　カバー	400
108	きたぐに	深田久弥	東京美術	S45　函	400
111	穂高の岩場1・2　（2冊）	岩稜会	朋文堂	S34　函	1500
116	日本の岩場	小森康行	東京新聞出版局	S50　3版　函	400

Climbing&Medicine・74

健康長寿のための山登り②
心拍数による運動強度の調節　齋藤 繁

「山登り」を習慣的な運動とすることで、健康長寿を満喫できるのでは、というお話を前回いたしました。では、実際に運動するときの運動負荷量は何を指標にしてどの程度とするのが適切なのでしょうか。特別な道具や技術がなくても測定できる指標として、心拍数が広く使われています。心拍数と主観的なつらさとのおおよその関係が示されていて、持久系のトレーニングとして適当な運動強度は、「ややきつい」程度とされています。これを心拍数に換算すると、各人の最大心拍数の60％を超えるぐらいという目安になります。このレベル以上の運動では、筋肉への酸素供給が不足状態となり、筋肉での乳酸産生が高まってしまいます。乳酸産生が高まる運動強度の変換点はAT（anaerobic threshold）と呼ばれ、この点での心拍数は「{（２２０－年齢）－安静時心拍数}×50％＋安静時心拍数」という式で予測されます。

健康増進を目的とする登山、競技選手でない登山者がトレーニングとして取り組む「山登り」では、筋肉を極端な酸素不足にしない程度を目標にするとよいでしょう。ただし、各個人の心拍数の最大値は右の式で予測されるので、年齢が上昇すると最大心拍数も下がってくることに注意が必要です。また、年齢を重ねるうちに暦上の年齢と身体的年齢の差が大きくなっている可能性があります。健康管理が上手で、肉体的な年齢が暦の年齢よりも若く維持できている人では、この式で引くべき数値が小さくなり、最大心拍数の低下が遅れますが、逆に不摂生を続けたことで身体的な衰えが進んでいる人では、暦年齢よりも引く数が大きくなり、最大心拍数が小さくなります。

心拍数は運動負荷量を測定できる指標として広く使われる

最大心拍数簡易予測式

「最大心拍数＝220－年齢」

どこまで心拍数が上げられるか限界まで運動負荷を上げて、実際の個人の最大心拍数を測定すれば、上記式の「最大心拍数」にその数字を代入することで、その人の身体的年齢が逆算できます。健康診断で運動制限を指示されていない方は、倒れても救護が得られる安全な環境で一度試してみてもよいでしょう。

〈参考図書〉

1)齋藤 繁　著 『病気に負けない健康登山：ドクターが勧める賢い登山術』(ヤマケイ山学選書)山と渓谷社　2010
2)齋藤 繁　著『「体の力」が登山を変える：ここまで伸ばせる健康能力』(ヤマケイ新書) 山と渓谷社　2014

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。
日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会　http//jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

山行委員会

歴史と花の山・福井の山旅

今回の参加者は9名。名物ソースかつ丼の昼食後、福井支部の方々と照りつける陽ざしのなかを朝倉遺跡一乗谷へと向かった。一乗城山へは、暑さに喘ぎながらも磨崖仏や不動清水の石仏等に歴史を感じながらの山行となる。馬出登山口から本丸のあった千畳敷より宿直跡に至ると、ゆったりと足羽川が流れる福井市内や山々の眺望を楽しめる。一の丸、二の丸、三の丸と進み、城山頂上を踏む。

2日目の登山は荒天のため丈競山山行は中止となったが、「駐車場から徒歩15分」の星峠という美しい点名を持つ一等三角点峰・一乗山へと車5台を連ねて出発した。容赦なく降る雨中の林道走破の末、無事一条山で記念写真に収まり、越前そばの昼食後、勝山市平泉寺へと福井支部の方々に案内していただく。びっしりと苔で覆われた境内は、雨に洗われて艶やかに美しく、杉の大木は四八社・三六堂・六千坊、僧兵8000人が暮らしたという往時の威風を伝えていた。

その夜は芦原温泉でくつろいで3日目は赤兎山登山。ゲートで登山料1人300円を払って入山。登山口のお地蔵様にご挨拶をして小原峠まで、昨日の平泉寺から続く禅定道の一部を行く。峠には石仏が安置されていた。トリアシショウマ・ギンリョウソウ・ゴゼンタチバナと花を探しながら急登。大船分岐を過ぎるとササユリが次々と姿を見せ、皆大喜び。山頂近くになってニッコウキスゲが鮮やかに出迎えてくれた。赤兎山点名赤鬼に11時着。展望なし。ササユリ・キスゲの大群落に歓声を上げつつ避難小屋に向かい、昼食。小屋周辺もキスゲが一杯で、降り出した雨の中でも美しく、歓声しきり。赤沼はモリアオガエルのオタマジャクシで一杯。雨で展望のないのは残念だったが、予想外のたくさんの花に出会えて大満足の赤兎山であった。連日、福井支部の皆様に同行案内していただき、名物羽二重餅のお土産まで頂戴して感謝しつつ福井を後にした。まさしく歴史の山・花の山でした。ありがとうございました。

（新本政子）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

青森支部

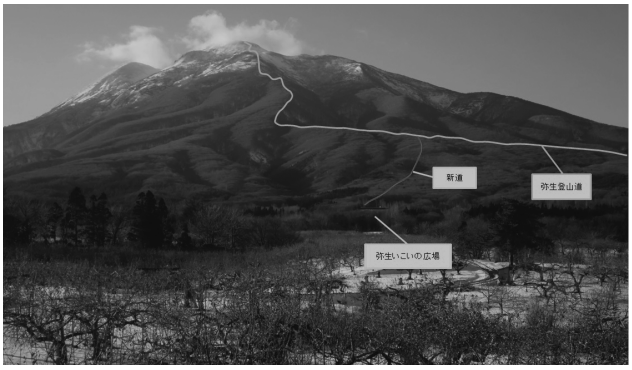
岩木山に「弥生新道」を開設

青森支部会員が中軸となって組織している「津軽百年の森づくり」（代表：根深誠、会員20名）では、今年から制定された国民の祝日「山の日」を記念し、岩木山に新道を開設した。岩木山の東麓にある弘前市野外活動施設「弥生いこいの広場」が登山口となり、旧道の弥生コースの三合目に合流するもので、名付けて「弥生新道」。

登山口の標高は250m、三合目が600m。この間、高度差350m、距離2㎞弱。二合目と三合目に道標を設置した。これによって旧来のコースが1・5㎞ほど短縮され、かつ「弥生いこいの広場」の活用にもつながることから利用が期待される。

この計画に関する構想は、かなり以前から温めてはあったのだが、このたびの「山の日」制定が実現の引き金になっている。実行に移すチャンスが到来したと考え、関係行政機関に昨年来、相談してきた。

新道は予定地が国有林内にあるので、計画を遂行するには所轄森林管理署の貸付を受けなければならない。貸付は相手が民間であれ



初冬の岩木山。弥生コースの新道と旧道を線で表示

ば有料、自治体なら無料である。そこで地元自治体、弘前市に相談し、貸付を受けてもらい、当会が事業委託を受けるという形にした。

ここで面倒なのは、貸付申請するにはコースを測量しなければならないことである。測量には３００万円ほどの費用がかかるとか。もちろん当会には、そのような資金的余裕はどこにもない。しかし、避けては通れないこの問題も、市内の測量事務所が無償で対処してくれたことで解決した。弘前市役所もまた50万円の予算を付けてくれた。

今回の「弥生新道」の実現はささやかではあるが、行政と市民が連携し、それぞれの立場を自覚し参画すれば、計画が実現するということの見本のようなものである。津軽森林管理署、弘前市役所、岩木山環境保全協議会などの関係諸機関、さらには地元弥生町会、共用林野組合、そして、一般登山愛好者などの理解と協力に感謝したい。

当日の８月11日は登山口で盛大に式典が挙行された。報道陣合わせて１００人余りが参集し、岩木山神社による神事、協力者への感謝状贈呈、代表・来賓挨拶、テープカット、登山囃子の競演、そして、記念登山が実施された。参加した30名ほどの登山者には証明書が手渡され、老若男女が夏のミズナラとブナの林を歩いた。

最後に、この秋までには、新道からさらに先の既存のコースも含めて整備し、山頂に記念のレリーフを設置したいのだが、その費用に関して、全国の心ある登山愛好者ならびに関係諸機関にカンパをお願いしたい。目標額85万円。振込先は、みちのく銀行土手町支店、普通口座２６４６４０３。津軽百年の森づくり。なにとぞ、よろしくお願いします。（根深 誠）

越後支部
高頭祭と弥彦たいまつ登山

７月25日に越後支部主催の第59回高頭祭と新潟県山岳協会主催の第63回たいまつ登山祭が、今年から実施される８月11日「山の日」の新潟県記念行事として、越後人の崇敬を集める弥彦山（６３４ｍ）にて盛大に開催された。来賓参加として、日本山岳会「山の日」事業委員会の成川隆顕氏、全国「山の日」協議会理事長の磯野剛太氏をお招きした。また、日本山岳協会八木原圀明会長も直前に参加連絡をいただき、「山の日」の記念事業としてふさわしい開催となった。

14時30分、桐生恒治副支部長の開式宣言で始まり、遠藤家之進正和支部長が開会の挨拶で「今年から８月11日、山の日が国民の祝日として実施される。越後支部の高頭祭と県山協のたいまつ登山祭を、新潟県の山の日記念行事として今後継続して取り組むこととなった。この記念すべき最初の行事に、日本山岳会で当初から山の日制定の重責を担われた成川さんと全国山の日協議会理事長の磯野さんを来賓としてお迎えした。また、日山協八木原会長も駆けつけていただき、御礼申し上げたい」と趣旨説明および来賓紹介をしていただいた。

高頭仁兵衛寿像前にて修祓・祝詞奏上が執り行なわれた。毎年この儀式は、関川村村長の平田大六越後支部名誉会員から本職神官並みのお祓いを行なっていただいている。玉串奉奠は、遠藤越後支部長、来賓の成川さん、磯野さん、八木原さん、阿部信一県山協会長などにより厳粛に執り行なわれた。

そして、寿像への献酒、寿像碑前で全員の記念撮影を行ない、成川さんに「山の日制定までの経緯と各支部の取り組み」と題する記念講演をしていただいた。数年前の宮下会長時代から始まった山の日制定までの背景と経緯を詳しく語っていただいた。

その後、成川さんや磯野さん、日山協八木原会長を囲んでの歓談となった。16時ごろより弥彦山頂の奥ノ院へ移動を始め、山頂御神廟

前にて開催される新潟県登山祭に参加した。17時より弥彦神社神官による「登山安全祈願祭および松明登山清め祓い」、17時30分からは磯野さんによる「山の日記念行事と全国的盛り上がりについて」の山頂記念講演が行なわれた。「山に親しむ機会を得て、山の恵みに感謝する――8月11日『山の日』の制定主旨は、登山だけでなく、山頂から山腹、山麓から山里を含む自然を体験すること。全国的なネットワークを構築、各種イベントの参加、山への感性を初等教育から育成し、次世代へ伝達することにより、地域社会の活性化を図る目的である」と講演された。

市中を行進するたいまつ登山隊

講演終了後たいまつ登山の開始となり、責任者である越後支部役員で地元弥彦山岳会・小林頼雄会長の指示によりたいまつが灯され、弥彦山頂から麓の弥彦神社を目指して下山開始する。来賓の方々にも参加していただき、越後岳人含め約170人の大行列となった。

20時、弥彦神社社殿にて山頂からの御神火としてお祓いを受け、ボーイスカウト鼓笛隊が先導して市中行進へと進んでいった。幻想的な弥彦神社の御神火に、市中沿道では御神輿部隊も一時停止して拍手をもって迎え、多くの参拝者・観光客が手を合わせ、たいまつ登山隊を歓迎してくれた。

夜空に舞い上がるスターマインの花火を見ながらのたいまつ行進は、最高潮の気分を演出し最も楽しい時間であった。弥彦駅までの行進を終え、たいまつを納めて終了し、弥彦公会堂で慰労会のビールを飲みながら喉を潤し、たいまつ登山の無事成功を祝った。

翌26日は成川さんに、高頭家菩提寺・大滝山正林寺にある高頭翁の墓参をしていただいた。

（桐生恒治）

会務報告

平成28年度第5回（9月度）理事会議事録

日時　平成28年9月15日㈭19時00分～21時34分

場所　集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・谷内各理事、平井監事（所用のため山賀理事は審議事項2まで、神長常務理事は審議事項4まで欠席）

【欠席者】星理事、重廣監事、

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・平成28年度（前期）海外登山助成対象登山隊の審査について

「東京農業大学創立125周年マナスル環境学術登山隊2016」を平成28年度（前期）海外登山助成対象登山隊として承認し、20万円を助成することとした。（賛成12名、反対なしで承認）

2・個人情報取扱規程の改正について

個人情報取扱規程を改正し、平成28年9月15日より施行することとした。（賛成12名、反対なしで承

認）

3・会員証取扱規程の制定について

会員証取扱規程を新たに制定し、平成28年10月1日より施行することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

4・準会員制度導入に伴う支部助成金などの変更について

準会員制度導入に伴い、平成29年度の支部助成金のうち事業補助金を300円減額し、支部会員1人あたり1000円とすることとした。また、準会員に関する運営交付金・新入会員獲得報奨金を会員と同額支給することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・委員会規程における業務内容の見直しと次年度事業計画の策定について（小林）

全委員会において委員会規程における業務内容の見直しを図り、次年度事業の具体的施策として会員増強策と「山の日」普及活動を盛り込むことについて協議した。

【報告事項】

1・8月の入会希望者18名（うち復活1名）、9月の入会希望者14名（再申請1名、復活1名）について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・秩父宮記念山岳賞審査委員会委員長の交代について報告があった。（大久保）

3・7月26日㈫に行なわれた内閣府による立入検査の実施状況および受検結果について報告があった。（吉川、佐藤）

4・寄付金19件の受入について報告があった。（吉川）

5・内閣府による立入検査時の指摘を受けて会計管理手続き等を変更することについて報告があった。（吉川）

6・財務状況と支部の現状分析について報告があった。（吉川）

7・各種資料の使用承認申請6件、後援名義使用申請1件、画像使用許可1件について承認したとの報告があった。（神長、佐藤）

8・平成28年度安全登山普及指導者中央研修会（第2回）の開催について報告があった。（佐藤）

9・マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業について報告があった。（大久保）

10・第1回「山の日」記念全国大会の実施状況について報告があった。（大久保）

11・日中韓三国学生交流登山の実施状況について報告があった。（中山）

12・平成28年度新入会員オリエンテーションの実施状況について報告があった。（谷内）

13・7月16日㈯～17日㈰に開催された自然保護全国集会について報告があった。（谷内）

14・9月10日㈯～11日㈰に開催された東日本支部合同会議の開催状況について報告があった。（佐藤）

15・登山教室等を実施する場合の旅行業法上の取扱いについて報告があった。（佐藤）

16・年次晩餐会の参加申込み方法の変更について報告があった。（佐藤）

17・同好会「平日クラブ」の新規登録について報告があった。（佐藤）

18・「山」、『山岳』の発行予定について報告があった。（神長）

19・『改訂　新日本山岳誌』の執筆者への印税支払いについて報告があった。（節田）

【今後の予定】

1・西日本支部合同会議　9月24日㈯～25日㈰　大阪アカデミア

2・次期理事会等　10月度常務理事会　10月4日㈫18時30分～　集会室　10月度理事会　10月12日㈬19時～　集会室
3・支部長会議　12月3日㈯10時30分～　京王プラザホテル
4・年次晩餐会　12月3日㈯13時30分（受付開始）　京王プラザホテル

会員異動
物故
阿部鉄男（６９６０）　16・9・4
内山鎮伸（１５５０８）16・8・26

退会
荻野和彦（８１８７）　岐阜

ルーム日誌 9月

1日　学生部　支部事業委員会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
2日　学生部　平日クラブ
3日　新入会員オリエンテーション
5日　総務委員会
6日　常務理事会　スケッチクラブ
7日　図書委員会　山行委員会
8日　フォトクラブ　山岳地理クラブ　九五会
9日　学生部
12日　資料映像委員会　スキークラブ
13日　山岳研究所運営委員会　学生部　緑爽会
14日　休山会　山想倶楽部
15日　理事会　医療委員会　科学委員会　みちのり山の会
16日　会員データ管理システムＷＧ　スケッチクラブ
17日　山の自然学研究会
20日　公益法人運営委員会　スキークラブ
21日　青年部　フォトクラブ　三水会　つくも会
23日　山岳編集委員会　山遊会
26日　総務委員会　図書委員会
27日　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ　山岳編集委員会　デジタルメディア委員会　再生員会　二火会
28日　自然保護委員会　麗山会
00会　ＳＵＮ燦会
29日　9月来室者　５０５名

INFORMATION インフォメーション

◆講演会のお知らせ　自然保護委員会

今、シカの食害問題は急速に拡大している喫緊の問題です。現状を知り、私たちに何ができるか、方法を考え行動するために、長年研究をしている高槻成紀氏（麻布大学いのちの博物館上席学芸員・理学博士）の講演会です。

演題「シカ研究者がみた最近の日本の山」
日時　11月25日㈮18時30分～20時30分（開場18時）
会場　日本山岳会ルーム１０４号室
参加費　５００円
定員　45名
問合せ　川口章子
TEL・FAX ０４７－４６３－８７２１
✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp

◆『木の目草の芽』１２４号を発行　自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』１２４号を発行しました。今号は「自然保護全国集会in高知」の報告号②です。四国支部の石川慎吾氏による基調講演「ＳＯＳ三嶺の自然」や、工石山と牧野植物園でのフィールドスタディ報告等を掲載しています。

購読申し込み
川口章子　TEL ０４７（４６３）８７２１　✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp まで。

▼またウェブサイトでもご覧いただけます。
ＪＡＣホームページ→日本山岳会の活動案内→自然保護委員会→委員会ウェブサイト→機関紙
http://www.jac.or.jp/info/iinkai/shizenhogo/newsletter.html

◆八方スキー集会のご案内　山行委員会

1月のスキー懇親集会は、多彩

なゲレンデを有す八方尾根にて開催します。宿泊は移動には好位置なゴンドラ乗り場至近の雷鳥ヒュッテです。
日程　平成29年1月22日㈰～24日㈫
費用　2万2000円（宿泊費、保険、通信、懇親会費等含む）
宿泊　八方尾根 雷鳥ヒュッテ
定員　25名（現地集合・現地解散）
申込み　12月20日までに会員番号、住所、氏名、電話等を明記し、郵送、FAX、メールで高橋聡宛
〒102－0072 東京都千代田区飯田橋2－12－10 FAX 03－3222－0908 ✉ sanko@jac.or.jp
＊参加申込者には詳細案内をお送りします。

◆第34回図書交換会

図書委員会

今年も図書交換会を年次晩餐会で開催します。
日時　12月3日㈯15時から抽選を開始します。14時から開場です。
陳列した本をご覧のうえ、抽選開始時間までに購入申込みをお願いします。
なお、年次晩餐会に出席されない会員も参加できます。また、例年どおり事前申込みも受付けます（事前申込みについては11ページに掲載）。
場所　京王プラザホテル　年次晩餐会会場
問合せ　三好まき子（TEL 090－8019－8601 ✉ 344mm@mbe.nifty.com）

◆「山の日」特別講演会開催

埼玉支部

白根御池小屋管理人をしている、高妻さん（埼玉支部員）のお話を聞く会を催します。富士山に次ぐ高峰北岳の中腹にあり、2230mの山小屋として多くの登山者のお世話に従事してきたなかでのよもやま話を、映像を交えてお話します。
講演者　高妻潤一郎氏
テーマ　「北岳周辺での登山・山小屋事情と変遷」〈副題〉白根御池小屋の歴史や、小屋周辺の花々・南アルプス北部の山々の紹介と近くで発生した山の事故の傾向と対策。
日時　平成28年12月7日㈬19：00～21：00（受付：18：30）
場所　浦和コミュニティーセンター10階　第13集会室（JR浦和駅東口パルコ内）
参加費　500円
申込み　埼玉支部安全登山委員会、宮川 ✉ miyachan-5go@tbb.t-com.ne.jpまたは携帯090－2648－1947へ

◆第2回雪崩のリスクを考える学生の会

日本山岳会／NPO法人日本雪崩ネットワーク

日本雪崩ネットワークと日本山岳会学生部は、大学山岳部・ワンダーフォーゲル部・クラブ等に所属する学生を対象に、雪崩安全対策に係わる会を催します。学生自らが、主体的に山岳に存在する危険について学びます。
目的　雪崩事故発生の可能性を低減するとともに、事故発生時の被害を軽減するため
日時　11月20日㈰13：00～16：00（開場は30分前）
会場　早稲田大学東伏見キャンパス　体育教室棟75－2号館　105号室（東京都西東京市東伏見2－7－5）
対象　冬山で活動する大学山岳部・ワンダーフォーゲル部・それに類するクラブで活動する大

「晩餐会記念懇親山行」のご案内

箱根外輪山の乙女峠・丸岳へのハイキングを行ないます。最高峰の丸岳は標高１１５４ｍで、ルート上からは富士山のほか、箱根山や芦ノ湖の展望が楽しめます。往復ともチャーターバスを利用する予定です。歩程は昼食休憩を含めて４時間程度、標高差５５０ｍ。

日時　平成28年12月４日㈰
雨天決行

集合　ＪＲ新宿駅西口　工学院大学ビル前　午前８時（時間厳守）

解散　ＪＲ新宿駅西口　午後４時（予定）

定員　１００人（定員になり次第、締切りとさせていただきます）

参加費・振込先　４５００円（バス代、記念品、写真代等含む）。

参加希望の方は11月11日㈮までに、必ず参加者の個人名で（会員番号明記の上）お振込みください《振込先＝三菱東京ＵＦＪ銀行　千駄木支店　普通　００８２８２９　名義　日本山岳会山行委員会　委員長・清登緑郎》。

振込まれた方には後日、詳細案内をお送りいたします。参加は事前振込が条件です。また、貸切バス予約のためにお振込後の返金はいたしかねます。

問合せ　清登緑郎
TEL ０９０－９３２５－８２５８、
✉ sanko@jac.or.jp

（山行委員会）

初冬の乙女峠

学生や専門学校生

内容　安全セミナー「雪崩の基礎と事故の実態」（日本雪崩ネットワーク講師による雪崩現象と事故統計についての講演）　事例報告「ヒヤリハット・事故の報告」（グループ・ディスカッションも）

会費　無料

申込み　日本山岳会ＨＰのイベント案内欄参照

◆松田敏男 山の絵画・版画展

南ア・北ア・尾瀬・大雪山、スイスアルプスの山や花を、シルクスクリーン・漆絵・日本絵画・色鉛筆画等、様々な手法で山の表情に迫った作品22点を展示します。

日時　12月13日㈫～18日㈰12：00～19：00（最終日は18：00まで）

場所　ギャラリー恵風　〒６０６－８３９２　京都市左京区丸太町通東大路東入ル南側

TEL ０７５－７７１－１０１１
FAX ０７５－７７１－０３５１
URL http://keifu.blog86.fc2.com/
✉ g-keifu@hotmail.co.jp

交通　＊京都市バス　熊野神社前バス停下車すぐ　＊京阪電車神宮丸太町駅より徒歩５分　＊京都市美術館から徒歩７分

❖編集後記❖

●この10月１日から「準会員制度」がスタートしました。かつては実績のある登山者のサロン的イメージの強い当会でしたが、近年は中高年者から若者まで、登山を体系的に学びたいと門を叩く人々が増えています。80年代の「中高年登山ブーム」から始まって「山ガールブーム」へと、日本の登山人口の底辺が大きく広がってきているからでしょう。そのような人々にとって少々高かったＪＡＣの敷居が、準会員制度によっていくらかでも下げられたら幸いです。

●しかし、未組織登山者を受け入れ、啓蒙・教育していくことは、大変エネルギーを要します。とりわけ次代を担う若き指導者の育成が喫緊の課題であり、その体制づくりが急がれます。

（節田重節）

日本山岳会会報　山　857号

2016年（平成28年）10月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　小林政志
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社